様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ５ 月 ２９ 日現在

機関番号：３２６７５
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2011～2013
課題番号：２３５２０３３１

研究課題名（和文）ジェイムズ・ジョイスの創作に及ぼしたアイルランド文学ルネサンスの影響

研究課題名（英文）The Influences of the Irish Literary Renaissance on James Joyce's Literature

研究代表者
結城　英雄（YUKI, Hideo）

法政大学・文学部・教授

研究者番号：７０２１０５８１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　2,800,000円、（間接経費）　840,000円

研究成果の概要（和文）：1890年代から1920年代にかけて、アイルランドでは豊饒な文学運動が開花し、それらの運動を称して「アイルランド文学ルネサンス」もしくは「アイルランド文芸復興運動」などと呼ばれている。本研究の目的は、そうした同時代の運動から、ジェイムズ・ジョイスが受けてた文学的影響について考察した。ジョイスは自国の狭隘な文学に反発し、大陸のモダニズムの運動に共鳴したとされるが、その文学観の形成の源泉は、何よりも同時代のアイルランドにあったと思われる。そこで当時の文学状況を詳細に検証し、ジョイスの創作への具体的な関連をさぐった。これまでのジョイス研究やアイルランド文学研究に対して、新たな知見ができた。

研究成果の概要（英文）：In Ireland from 1890s to 1920s, there happened a fruitful literary movement called the Irish Literary Renaissance or the Irish Literary Movement. The purpose of this study is to investigate the literary influences on James Joyce of the movement. Joyce is said to have rejected the narrow literary movement in those days and sympathized instead with the modernist movent on the continent. However, Joyce might have been most of all inspired in his early literary career by the contemporary literary movement in Ireland. That is why I elucidated the contemporary Irish literature in detail and the concrete relationship with Joyce's literary achievements. Among the Irish writers of the Irish Literary Renaissance, I concentrated especially on W. B. Yeats, Lady Gregory, John Millington Synge and George Moore, as well as John Eglinton, Edward Martyn, George Russell,Katharine Tynan and Alice Milligan.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・英米・英語圏文学

キーワード：ジェイムズ・ジョイス　アイルランド　ダブリン　ルネサンス

１．研究開始当初の背景

(1) ジェイムズ・ジョイスの文学は、W. B. イェイツ、ジョン・ミリントン・シング、ジョージ・ムア、あるいはレイディ・グレゴリーといった、アイルランド文学ルネサンスの主要な作家たちとの対立から開始されたと論じられることが多い。事実、ジョイスの一連の作品には、そうした年長の作家たちへの風刺が込められているように思われる。ジョイスが土着のカトリックであったのに対し、アイルランド文学ルネサンスの作家のほとんどがイギリス系のアイルランド人であった。両者の間には屈折した対立が胚胎していたであろう。アイルランドにおけるジョイス研究もそのような対立を前提に展開している。

(2) 同時に、ジョイスの文学は大陸との関係で論じられることも多い。ジョイスは若くしてアイルランドを脱出、その後はトリエステ、チューリヒ、パリと大陸の都市を移り住んだ。いずれの作品も祖国アイルランドの都市ダブリンを舞台としながらも、手法やテーマなど大陸の文学の影響が色濃い。文学の地平を徹底的に開拓したため、国際的な作家として賞賛されている。ジョイスの作品がモダニズムという時代精神から誕生していることに疑念はない。1905 年から 1915 年に到る 10 年ほど暮らしたトリエステは、オーストリア＝ハンガリー帝国支配下の多民族・多言語の都市であった。また、第一次世界大戦のために1915年から1919年まで疎開していたチューリヒでは、世界各地から集まった作家や思想家の新しい考えに関心を示した。そして 1920 年から 1940 年まで留まったパリでは、様々な領域でモダニズムの運動が展開していた。ジョイスが移り住んだこれらの都市の文学風土が、その創作に影響を与えていたことに間違いない。

(3) いずれにせよ、アイルランドの文学ルネサンスからジョイスが受けた影響が無視されている。実のところ、その創作の源泉は同時代のアイルランドにあったのではなかろうか。短篇集『ダブリンの市民』(1914)の着想は、ジョージ・ムアの『未耕地』(1903)の影響によるものであろう。また、自伝的小説『若い芸術家の肖像』(1916)も、ムアの『一青年の告白』(1886)を意識したものであろう。そして『若い芸術家の肖像』と同じくギリシア神話に拠って立つ叙事詩『ユリシーズ』(1922)も、W. B. イェイツの神話的手法のみならず、アイルランド文学ルネサンスの作家たちのギリシアの古典文学に対する関心に啓発されていると言えよう。さらに、『フィネガンズ・ウェイク』(1939)の構想も、アイルランド文学が胚胎する言語問題に触発されていると同時に、イェイツの『幻想録』(1925, 1937)とも連動している。

２．研究の目的

(1) そこで本研究ではダブリンの文学事情を考察し、ジョイスがどのように文学的に自己定立してきたかに着目することにした。ジョイスがトリエステ、チューリヒ、パリといった都市を移り住み、それぞれの都市の影響を受けたことは否めない。が、そのような事情を念頭に入れながらも、アイルランド文学ルネサンスとジョイスとの関わりを精査し、その運動がジョイスに及ぼした影響が少なからぬものであったことを検証することは、ジョイス研究にとって必須である。

(2) 実のところ、ジョイスが若くして大陸の思想を取り込んだとしたら、そのような意識を形成する、脱国家的な文学風土がアイルランドに存在していた考えるべきである。事実、同時代のほとんどすべての作家が、大陸の文学の動向に敏感に反応していた。そこでジョイスの文学も、アイルランド文学ルネサンスという制度との関わりで誕生したことを検証する必要もあるだろう。

(3) さらに、アイルランド文学ルネサンスの文学者とジョイスの関係は、今日のアイルランドにおける文学観においても、いまだに歪められているところが大きい。そのため、アイルランドの文学的伝統の形成という視点から、ジョイスの文学の意味を再考し、その位置を測定することも不可欠である。

３．研究の方法

(1) アイルランド文学ルネサンスの作家とジョイスの関係を考察するため、ムア、イェイツ、シング、グレゴリーといった著名な作家のみならず、キャサリン・タイナン、ジョン・エグリントン、ジョージ・ラッセル、エドワード・マーチン、アリス・ミリガンといった知名度は低いがそれなりに重要な人物を取りあげ、ジョイスとの関わりを検証することにした。

(2)各作家を扱うに際して、主要な作家の作品のみならず、手紙、評論、伝記、書評、評価、さらには交遊録なども対象として、ジョイスとの関わりを検証した。アイルランド文学ルネサンスという言葉で一括することは個人的な作家の特色を無視することにも等しく、ジョイスとの関わりの度合いを細かく精査することが何よりも必要であった。

(3)本研究においては、アイルランド文学ルネサンスに関わった文学者を網羅的に考察するが、限られた年度内での研究のため、対象を絞ることにした。そのためムア（小説家）、イェイツ（詩人・劇作家）、シング（劇作家）、グレゴリー（劇作家）、エグリントン（随筆家）などを主要な研究対象とした。

４．研究成果

(1) ムアとジョイスの関係については敵対

という言葉がふさわしいし、いずれも相手を誹謗するような発言をしている。しかしジョイスの『ダブリンの市民』がムアの『未耕地』に影響を受けたことは明らかである。カトリック批判においても類似している。また、ジョイスの『若い芸術家の肖像』がムアの『一青年の告白』に触発されていることも明らかである。いずれも芸術家小説であり、ムアは「天啓」、ジョイスは「顕現」をその手法に使用している。さらに、ジョイスの「内的独白」の手法もムア経由のものである。ジョイスはその源泉をフランスの象徴派詩人のエドワァール・デジャルダンに帰しているが、デジャルダンとムアは友人である。この関係を意識して、ジョイスはムアの名を挙げず、デジャルダンを称揚しているが、ムアも『湖』(1905)において、内的独白の手法を試みている。ジョイスが大陸のデジャルダンに影響を受けたのは、ダブリンでムアに接したからである。

(2) ムアの場合と同じく、ジョイスはイェイツにも反発していたと言われることが多い。実際、ジョイスの文学はイェイツへの風刺が込められていると思われるが、ジョイスへのイェイツの影響は計り知れない。イェイツはジョイスの創作に対して協力を惜しむことはなく、ジョイスの側でもイェイツのノーベル賞受賞に讃辞を送り、死に際しても哀悼の意を表していた。ジョイスはイェイツに敵対していたどころか、その作品を微細に読み込み、その手法を自らの創作に取り込んでいたのである。その神話的手法は民俗学の展開と軌を一にしたモダニズムの手法と考えられているが、ジョイスはアイルランド古代の民話を基にしたイェイツの文学を念頭に入れていたはずである。それゆえ、ジョイスの「内的独白」の手法は個人の意識を描出するだけでなく、個人の意識を構成する西洋文化を喚起する手法であり、イェイツの「大いなる記憶」とも連結している。

(3) ジョイスはシングよりも 10 歳ほど年下で、両者の間には深い関係は認められない。1903 年にパリで出会い、このとき文学論を交わしたにすぎない。にもかかわらず、両者は文学観において近いところで活動していたと思われる。アイルランド文学ルネサンスの文学者の多くがそうであったように、シングもアイルランドで孤立を感じ、大陸を放浪しながら、自らのアイデンティティを確立していた。ジョイスはカトリックであったが、やはり似たような状況にあった。シングがアラン諸島のような古代の伝統を留める地域に拠点を見出したとすれば、ジョイスはダブリンやヨーロッパの都市に題材を求めたにすぎない。根底において両者には通じるところがあった。シングの最初の劇は『谷間の陰』(1903)であり、イプセンの『人形の家』(1879)と類似している。イプセンはジョイスが早い時期から傾倒をしていた劇作家でもあり、シングの視点はジョイスのものでもあった。また、『海に騎りゆく者たち』(1904)に対してジョイスは批判的であったとされるが、これはギリシア劇のテーマを彷彿させ、ジョイスに羨望を抱かせた。同じく、『西国の伊達男』(1907)をめぐる観客の騒動事件も、ジョイスに羨望を抱かせた。シングは近代性を前にしてアラン諸島のような島にアイデンティティを求めたが、これはジョイスの反自我であったと思われる。

(4) ジョイスは『ユリシーズ』第十二挿話で、「おれ」という無名の語り手に、「あばよアイルランド、おれはゴートへ行くぜ」と語らせている。この語り手はゴートがアイルランドではないと言っているのである。ゴートとはグレゴリーの居住地「クール・パーク」のあるところで、語り手はその地域がアイルランドではないと述べていることになる。言い換えるなら、グレゴリーの周りに集まるアイルランド文学ルネサンスの文学者たちの作品は、アイルランドの現実から遊離している私的空間の産物ということである。このようにジョイスはグレゴリーに対して一線を画しているように思われるが、両者に共通するところも多い。その一つがグレゴリーの自己批判である。彼女は『ダーヴォギラ』(1907)、『監獄の門』(1908)、『グラーニア』(1912)などの劇作において、イギリス系アイルランド人としての出自に疑義を提起していた。この自己批判はジョイスのものでもあった。もう一つの共通点は民話に対する関心である。ジョイスはグレゴリーの民話に懐疑的であり、酷評したこともあるが、『フィネガンズ・ウェイク』の創作のころには、グレゴリーの真価を認めることになっていた。

(5) ジョイスとエグリントンとの関係に着目されることはないが、民族主義が高揚する時代にありながら、国家よりも芸術家に優位をおく、コスモポリタンとしてのエグリントンの孤高な文学者としての姿勢は、ジョイスが模倣すべき手本であった。1922 年に自由国成立後、イギリスへ亡命したのもアイルランドでの孤立のためであった。ジョイスの『若い芸術家の肖像』の創作も、エグリントンの影響によるところが大きい。また、ジョイスのアイルランドからの離脱の決意も、エグリントンの助言によるものであった。ジョイスは国立図書館に勤務するエグリントンを訪れ、色々と助言を仰ぐこと再三であった。両者の間には奇妙な同調があった。

(6) このようにジョイスとアイルランド文学ルネサンスとの関係は複雑であるが、この運動のいずれの文学者もジョイスの文学の展開にきわめて重要な役割を担っていた。大きく三点に分けて概括するなら、以下のようにまとめられる。①アイルランド文学ルネサ

ンスという呼称で一括されることが多いが、その運動に連なる作家たちも、相互に文学観を異にし、ジョイスの反応も異なっていた。そして表面的な敵対があったにしても、ジョイスの創作の地下水脈として救い上げられる作家も多かった。②ジョイスの作品における、モダニズムという大陸の文学からの影響によると思える部分も、当時の文献をひもとくとき、その文学観のかなりの部分が、アイルランド文学ルネサンスの作家たちと共通するものである。いずれの作家も大陸の文学運動に敏感に反応していた。③こうしたジョイスの立場をめぐり、プロテスタントとカトリック、イギリス系とケルト系、といった対立図式が描かれるが、これは具体的な根拠を欠く「大きな物語」であり、アイルランドのカトリックが想定する予定調和的な国民文学史の方便であるだろう。④こうしたジョイスへのアプローチで参考になったのが、ディケンズに対するオーストラリア側からの視点であった。ジョイスにとってのアイルランドは必ずしもアイルランド事情に都合のよいものではない。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　9　件）
① 結城　英雄、「アイルランド文学ルネサンスとジェイムズ・ジョイス(5)」、『法政大学文学部紀要』68 号、査読無、2014、59-70
② 結城　英雄、「アイルランド文学ルネサンスとジェイムズ・ジョイス(4)」、『法政大学文学部紀要』67 号、査読無、2013、27-38
③ 結城　英雄、「『ユリシーズ』を読む―100のＱ＆Ａ(14)」、『すばる』（集英社）7 月号、査読無、2013、286-300
④ 結城　英雄、「アイルランド文学ルネサンスとジェイムズ・ジョイス(3)」、『法政大学文学部紀要』66 号、査読無、2013、17-29
⑤ 結城　英雄、「アイルランド文学ルネサンスとジェイムズ・ジョイス(2)」、『法政大学文学部紀要』65 号、査読無、2012、49-62
⑥ 結城　英雄、「『ユリシーズ』を読む―100のＱ＆Ａ(13)」、『すばる』（集英社）4 月号、査読無、2012、354-369
⑦ 結城　英雄、「アイルランド文学ルネサンスとジェイムズ・ジョイス(1)」、『法政大学文学部紀要』64 号、査読無、2012、23-36
⑧ 結城　英雄、「ジョイスの時代のダブリン(12)」、『法政大学文学部紀要』63 号、査読無、2011、15-28
⑨ 結城　英雄、「『ユリシーズ』を読む―100のＱ＆Ａ」、『すばる』（集英社）4 月号、査読無、2011、278-294

〔学会発表〕（計　1　件）
① 結城　英雄、「『ユリシーズ』をめぐるナボコフの文学講義」、日本ナボコフ協会大会、2013 年 5 月 11 日、東京都・東京大学駒場キャンパス

〔図書〕（計　2　件）
① 結城　英雄　他、金星堂、『英文学と他者』（「ピーター・ケアリーの『ジャック・マッグズ』を読む―ディケンズのアイルランド表象への異議」）、2014、232(77-94)
② 結城　英雄　他、国文社、『亡霊のイギリス文学―豊饒なる空間』（「『ユリシーズ』における亡霊たち」）、2012、383(354-369)

６．研究組織
(1)研究代表者
結城　英雄　（YUKI, Hideo）
法政大学・文学部・教授
研究者番号：70210581